

印西市域と北総の「百庚申」について―最近の調査と知見から―

蔵 由 美

はじめに

庚申塔は、近世からの村落共同体建立の石塔を代表する石造物である。千葉県では松戸市幸谷観音境内の寛永二年（一六二五）の板碑型山王廿一社文字塔を近世庚申塔の初出（1）として、文字塔のほか阿弥陀・地藏・聖観音などの像塔を経て、江戸中期には青面金剛像造塔が定番化し、後期前半は「青面金剛」銘、文政期頃からは「庚申塔」銘の文字塔が主流となり、最も普遍的な石造物として、数多く建てられてきた。

村境の庚申塚には、これら各時期の庚申塔が数基以上の並ぶ姿は珍しくないが、北総及び印西市域の庚申塔群で特異なのは、江戸後期から近代にかけて建立された「百庚申」である。

百庚申は、一石に「百庚申」銘や「庚申」などの文字を多数刻んだ「一石百庚申」と、百基または多数の庚申塔を一か所に造立する「多石百庚申」があり、その目的は祈願のための供養は数多い方が有効との「数量信仰」に基づくという。

百庚申については、『千葉県石造文化財調査報告』（2）の「庚申塔」の章の本文に数行の概説と表に一〇例が紹介されているが、『房総の石仏』第二二号に榎本正三氏が「武西の百庚申」（3）と題して、江戸後期に派生した北総の百庚申の概説と印西市武西（むざい）の百庚申の調査結果を詳しく報告し、さらに北総

の百庚申二三例（うち一例は茨城県）の表を掲載され、この報告は筆者にとつて地域の百庚申を理解するための好資料であった。

この「北総百庚申」表の二三例のうち、二〇例が多石百庚申で、印西市域に多石百庚申が五例もあることも驚きであったが、さらに、筆者が同行した二〇一四年二月の印西市教育委員会の調査で、榎本氏の表にあつた本埜地区（旧本埜村域）笠神の笠神（かさがみ）社に加えて、同地区の蘇羽鷹（そばたか）神社にも近代の百庚申が造立されていたことがわかり、印西市域の百庚申は六例となった。

武西の百庚申のほか、印西地区の小林と浦部の百庚申については、印西市教育委員会の調査報告書『印西市石造物』（15・17）に掲載されているが、本埜地区の笠神の笠神社と印旛地区（旧印旛村域）の松虫の百庚申については、両地区の石造物調査が未完で、榎本氏の表の簡潔な一行データ以外の情報がないことから、これら印西市域の三か所の百庚申について、筆者が調査した結果を報告したい。

また、一石百庚申を含む北総の百庚申について、最近刊行された東庄町や旧小見川町など各地の石造物調査報告、匝瑳市などの広報から新たに把握できた三〇例を含む計五二例の百庚申を表1と表2で紹介し、併せてその考察を述べたい。

一 印西市域の百庚申から

1 笠神社の百庚申

榎本氏の「武西の百庚申」(3)の「北総の百庚申の対比表(平成十年十一月調査)」の「番号四」に記載されている百庚申である。(同書の「昭和六十年資料」表では「番号五」)

印西市笠神社は、江戸時代の干拓による田圃の中の台地の裾を巡る集落で、中世には、利根川と印旛沼が合わさる内海に突き出していたこの独立台地に、笠神社が築かれていた。城主の館跡と推定される台地の東側の山腹には南陽院という寺院があり、また南側山麓の鳥居から参道を登ると、笠神社の物見台であったと思われる蘇羽鷹神社がある。また西側山麓には、中世城館地名である字「根古屋」の集落があり、その集落を通るムラ往還に沿って産土の笠神社が鎮座している。(図3)

笠神社のこの百庚申は、笠神社の社殿に向かって左側(北側)に四一基、右側(南側)に五四基が向かい合って設置され、青面金剛像塔一七基、「庚申塔」銘の文字塔七八基、計九五基が並び姿は壯観である。(写真1・2)

像塔の高さは六〇cm前後、文字塔は四八cm前後で、いずれも駒型で、脇に年銘があり慶應元年(一八六五)の三年間に建立されており、造立年別に集計すると、次の通りとなる。

- ・慶應元年(一一基(像塔二基・文字塔九基))
- ・慶應二年(三六基(像塔七基・文字塔二九基))
- ・慶應三年(三〇基(像塔七基・文字塔二三基))
- ・年不明(一一八基(像塔一基・文字塔一七基))

配置図を図1に示したが、二〇一四年二月の時点ではまだ新しいコンクリートの基礎上に据えられてあったことから、二〇

一一年三月の東日本大地震後に建て直されたとみられ、九五基の元の並び方の順は不明であるが、配置図から当初、慶應元年塔は左側の列の手前に、慶應二年塔は同列の奥に、慶應三年塔は右側に配置されていたと推定される。

石塔脇の寄進者と思われる銘は、「船戸 根子屋 講中」「舟戸」や「根子谷」の表記もあり)が一七基、個人名が村内四二名、村外が一三名、無銘または不明が二三基であった。

青面金剛像の像容は、剣とショケラを持つ六臂像で、頭部が天を衝くようにとがっていて、この像容は、同時期に近くの栄町上町に建立された百庚申の青面金剛像によく似ている。また足元の邪鬼は、石工の個性がよく出ていて、その正面を向く姿はとてもユーモラスである。

また損傷した石塔数基分が右側の列の後ろに寄せ集められてあり、数えると同塔一基と文字塔四基の計五基分あり、これを復元すれば元は像塔一八基、文字塔八二基の計一〇〇基となる。

現在の像塔と文字塔の割合は、ほぼ一対四の比率なので、像塔一基に文字塔四基のサイクルで連続して並べられていたと思われる。

百庚申以外には、五基の庚申塔が百庚申の列に並んでいる。

最古は享保七年(一七二二)銘の二童子と三猿がつく高さ九八cmの青面金剛像塔で、天保九年(一八三八)銘、万延元年(一八六〇)銘、慶應三年銘(一八六七)、年不明がつづく。このうち高さ一四五cmの文字塔の建立日「慶應三卯年十一月吉日」銘は、百庚申造立の三年目の慶應三年の建立月日と同じで、また台石に三三名の人名が刻まれていることなどから、百庚申完成供養を目的に建立されたと推定される。

榎本氏の平成一〇年調査表では、像塔一三基と文字塔八八基の計一〇一基、百庚申以前の庚申塔四基となっているところから、この大型の文字塔も百庚申に入れているのであろう。

写真1 笠神の笠神社の百庚申（北側列・左3基は慶應元年銘）



写真2 笠神の笠神社の百庚申（南側列・慶應2~3年銘）



写真3 笠神の蘇羽鷹神社の百庚申（昭和10年銘の列）



明治16年銘像塔



図 1

笠神社の百庚申配置図

鳥居

百庚申 13基	42	文字塔	一・11・吉
	43	像塔	
	44~45	文字塔	
	46	文字塔	慶應一・9・吉
	47~52	文字塔	
	53	文字塔	慶應元・9・吉
	54	文字塔	慶應2・9・吉
	55	像塔	慶應2・9・吉
	56	像塔	慶應3・11・吉
庚申塔	1	文字塔	天保9・9・吉
庚申塔	2	文字塔	
庚申塔	3	文字塔	万延元・一・一
百庚申 39基	57	文字塔	慶應3・11・吉
	58	文字塔	慶應2・9・吉
	59	文字塔	慶應2・一・一
	60~65	文字塔	慶應3・11・吉
	66	文字塔	慶應3・一・吉
	67	文字塔	慶應2・9・吉
	68~69	文字塔	慶應3・11・吉
	70	像塔	慶應2・9・吉
	71	文字塔	
	72	像塔	慶應2・9・吉
	73	像塔	慶應3・11・吉
	74	文字塔	慶應3・11・吉
	75~76	文字塔	慶應元・9・吉
	77	文字塔	慶應3・11・吉
	78	像塔	慶應2・9・吉
	79~80	像塔	慶應3・11・吉
	81	文字塔	慶應2・9・吉
	82	文字塔	
	83	像塔	慶應3・11・吉
	84	文字塔	慶應一・11・一
85	像塔	慶應3・11・吉	
86	文字塔		
87	文字塔	慶應3・一・吉	
88~95	文字塔	慶應3・11・吉	
庚申塔	4	像塔	享保7・11・吉
庚申塔	5	文字塔	慶應3・11・吉

百庚申 41基	1	像塔	慶應元・9・吉
	2	文字塔	慶應元・9・吉
	3	像塔	慶應元・9・吉
	4	文字塔	慶應2・9・一
	5	文字塔	慶應元・9・吉
	6	文字塔	慶應2・9・吉
	7	文字塔	慶應一・9・一
	8~10	文字塔	慶應元・9・吉
	11	文字塔	慶應2・9・吉
	12	文字塔	慶應2・9・吉
	13	文字塔	
	14	文字塔	慶應2・9・吉
	15	文字塔	慶應元・9・吉
	16	文字塔	慶應2・9・吉
	17	文字塔	慶應一・9・一
	18	文字塔	慶應3・11・吉
	19	文字塔	慶應2・9・吉
	20	文字塔	慶應3・11・吉
	21~22	文字塔	慶應2・9・吉
	23	像塔	慶應2・9・吉
	24	文字塔	慶應2・9・吉
	25	像塔	慶應2・9・吉
	26~28	文字塔	慶應2・9・吉
	29	文字塔	一・11・吉
	30~37	文字塔	慶應2・9・吉
	38	像塔	慶應3・11・吉
	39	文字塔	
	40	文字塔	慶應一・11・一
	41	像塔	慶應2・9・吉

笠神社社殿

2 笠神の蘇羽鷹神社の百庚申

笠神城の物見台跡と推定される尾根上に鎮座する蘇羽鷹神社境内には、享保一八（一七三四）年「南無青面金剛尊／同行三十人」銘の庚申塔と、近代になって建立された百庚申が図2の配置図のように狭い境内両脇に整然と並んでいる。

百庚申は、高さ四一〜五一cmの駒型の「庚申塔」銘の文字塔五四基と、青面金剛像塔六基の計六〇基で、右面には一部に建立年月日が、左面にはすべてに寄進者名が刻まれている。

造立された年銘別に分けると、社殿に向って右側、鳥居の右横の塚上に明治一六年（一八八三）銘の文字塔五基と像塔一基の計六基、参道左側の燈籠の手前に、明治三三年（一九〇〇）銘の文字塔一七基と像塔二基の計一九基があり、社殿前の広場の右側には昭和一〇年（一九三五）銘の像塔三基と、年銘はないが昭和一〇年と推定される文字塔二四基の計三三基が配置されている。像塔と文字塔の配列は、明治一六年の八基は中央に像塔を、明治三三年の一九基は両端に像塔を置き、昭和一〇年の三三基は両端と中央付近に像塔を置く。

二〇一六年現在、明治三三年の一九基は仰向けに倒れたまま、落ち葉や苔に覆われているが、全体に建立後の補修はないとみられる。

青面金剛像の像容は、笠神社の幕末期の百庚申の主尊の表情にみられる怒髪天を衝くような勢いはなく、衣文の表現も簡略化され、邪鬼もかろうじて存在しているばかりであるが、明治以降の像容のある石仏は、一般的に子安像か地藏像ぐらいであり、近代の青面金剛像の像容例として極めて貴重である。

この百庚申の建立には三次にわたって五二年間かかっており、近代に入って、笠神地区の三世代の人々により造塔が継続された事例は類を見ない。

また百庚申には四〇基足りないが、六〇という数は千支の一

周の数でもあり、また狭い境内に合わせた数であったと推測される。

写真4 笠神蘇羽鷹神社



図 2

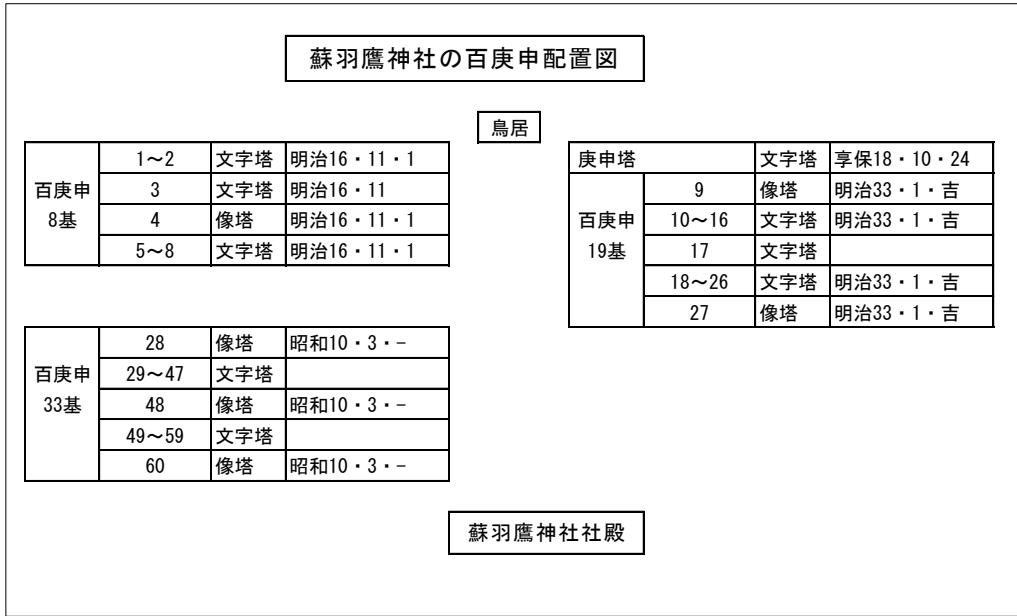


図 3 笠神の笠神社・蘇羽鷹神社地図



3 松虫の路傍の百庚申

印旛地区松虫の路傍の百庚申については、榎本氏の「北総の百庚申」表の番号六に「文政二年銘・像塔一〇〇基」というデータがある。

松虫寺は、聖武天皇の皇女松虫姫が重病を患って下総に下向、萩原郷の薬師仏により病が癒えたので、一寺を建て松虫寺と名づけたという伝説の古刹で、国の重要文化財の七仏薬師像もあり、史跡散歩などで訪ねることも多々あった。

その松虫寺山門前の路傍には百庚申があり、その数が五〇基であったことから、その残りの五〇基はどこにあるのかという疑問があった。松虫寺の前の路傍とは少し離れた杉自塚（姥塚）の付近にも百庚申らしき石塔群をかつて見た記憶があったので、今回改めて調べてみると、松虫寺山門前の路傍の百庚申と同じ仕様の庚申塔が五〇基並んでいて、合わせて一〇〇基が半数ずつ二つの地点にあったことがわかった。

以下、図4の地図に示したように、松虫寺前の路傍を第一地点、杉自塚付近を第二地点として、分けてその現状を報告する。

① 第一地点の百庚申と石造物

松虫寺へ向かう道の右側（南側）に、手前から移転記念碑「松虫百庚申之碑」、庚申塔、百庚申の像塔五〇基及び灯籠などの残欠が図5のように設置されている。

記念碑の銘文は次の通りである。

「 松虫百庚申塔之碑

此處に奉祀する青面金剛像群は区内三良谷にある一群の尊像と共に、松虫百庚申塔と呼ばれるものでもと区内長作に祀られ

ていた享保十八年／＼はじめて中尊が奉斎されたが文政十二年願主右兵衛氏／＼等有志十七人によつて更に百基の庚申塔を建立して松虫村の安泰を祈念し爾来子孫代／＼これを継承して今日に至つたが同所が県営ニュータウンの用地とな／＼るため此の地に移し祀られたものである茲に遷座を記念し関係者の名／＼を刻銘してこの碑を建立する

昭和四十六年十二月申日

松虫庚申講一同

碑文の「三良谷」については、印旛歴史民俗資料館でいただいた小字地図により、松虫寺北側の杉自塚付近と判明し、移転当初から二つの場所に分けて配置したことが確認できた。

記念碑の左側には、安政二年（一八五五）銘の角柱型文字塔の庚申塔があり、その右側に百庚申の高さ約五〇cmの青面金剛像塔が前後二列で隙間なく並ぶ。百庚申の列中央に木製の小祠があり、中に享保十八年（一七三三）銘の青面金剛像塔が祀られている。「松虫百庚申之碑」でいう「もと区内長作に祀られていた」百庚申の中尊である。

百庚申はこの中尊を中心に、左側に二八基、右側に二二基が配置されていて、すべて青面金剛像塔である。その像容は、ユーマラスなさまざまな表情で、素朴な彫法かつ画一的ではないことから、複数の石工が係つて造つたのであろう。

また、灯籠残欠にも「文政十二年（一八二九）十一月吉日」の銘が刻まれてあり、移設前は、武西の百庚申のように、百庚申に付属する奉賽物としてその景観を整えていたと推察される。

写真5 松虫の百庚申 第1地点左側の列



写真6 松虫の百庚申 第1地点右側の列



写真7 松虫の百庚申 第2地点 杉自塚と北側の列



写真8 ニュータウン開発前の松虫の百庚申 (出典4)



図4 松虫の百庚申 地図



図5

松虫の百庚申 第1地点(松虫寺前の路傍) 配置図			
「松虫百庚申之碑」		平石型	昭和46・12・吉
庚申塔		角柱型・文字塔	安政2・2・吉
右前列	残欠		
	灯笼残欠		文政12・11・吉
	残欠2基		
	36	百庚申・像塔	
	残欠		
	29~35	百庚申・像塔	
右後列	37~50	百庚申・像塔	文政12・11・吉
(祠内) 庚申塔		駒型・像塔	享保18・9・吉
左前列	1~13	百庚申・像塔	文政12・11・吉
左後列	14~28	百庚申・像塔	文政12・11・吉

松虫の百庚申 第2地点(杉自塚) 配置図

松虫の百庚申 第2地点(杉自塚) 配置図			
杉自塚から奥への道沿い			
南側手前	51~61	百庚申・像塔	文政12・11・吉
(祠内) 石塔		不明	
(祠内) 庚申小塔4基			不明
南側奥	62~74	百庚申・像塔	文政12・11・吉
東 ← 丁字突き当り・杉自塚		林道	林 → 西
塚廻り	灯笼残欠		文政12・11・吉
	庚申塔	自然石・文字塔	
(祠内) 道標付庚申塔		駒型・文字塔	文政12
北側	74~100	百庚申・像塔	

図6 松虫の百庚申の元あった場所の地図

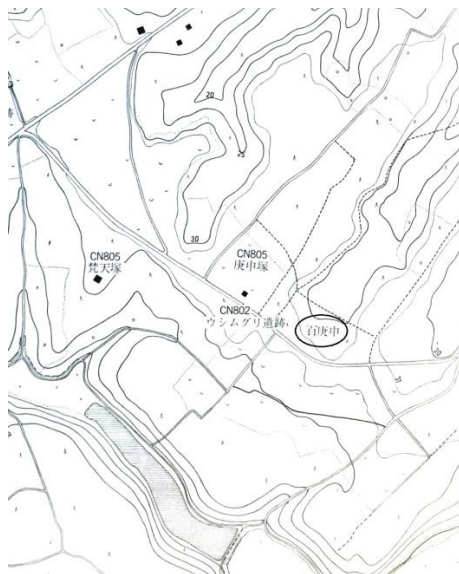


図7 左の場所の現在の地図



② 第二地点の百庚申と石造物

「杉自塚」は、この地に残って養蚕や機織りを伝えた松虫姫の姥「杉自」を慕う村人が、その没後に築いたという伝説の塚で、小字三良谷、松虫寺北側の道のT字分岐路にある。(図4)

百庚申の像塔は、この塚を起点に株木を経て木下に通じる古道入口の左側に二三基、右側に二七基の計五〇基が並べられている。(図5) 左側の手前から一〇基目と一一基目の間には樹木と祠があり、祠内には崩壊して像容不明の角柱型石塔とその残欠が、石塔の前には、高さ一五〇二五cmぐらいの小型な駒型の文字庚申塔四基があった。

右側は、手前に祠があり、中に「庚申／文政十二年九月日」銘の道標付庚申塔があり、その左から二七基の百庚申像塔が並んでいる(写真7)。

またT字路中央の塚には、「文政十二年十一月吉日」の銘の灯籠の残欠があり、第一地点と合わせて、当初は一对の灯籠であったことがわかった。その他「庚申塔婆」銘の自然石の石塔がある。

以上の事から、この百庚申は、中尊の享保十八年銘庚申塔、道標付庚申塔、一对の灯籠などと共に、長作の旧地からニュータウン造成のため移転したと判明したが、元あった長作の場所や景観はどうであったのだろうか。

印西市教育委員会の能勢幸枝氏に問い合わせたところ、『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』(4)に掲載された地図と写真を見ることができた。

もと百庚申のあった場所(図6)は、松虫寺から五〇〇m位南、現在の北総鉄道の印旛日本医大駅の東側線路の脇あたり(図7)と推定され、かつて道沿いに中尊を中心に左右に百庚申が並んでいた姿(写真8)は壮観であった。

二 北総の百庚申について

1 多石百庚申の現状

表1は、榎本氏の「武西の百庚申」(3)にある表を基本に、最新の知見によるデータを補充した表で、一石百庚申は別の表2にまとめ、また取手市小文間の例は一応県外として外し、四一例の多石百庚申を、東端の所在地から西へ列挙した。

この四一例の中で、多石百庚申の先駆けとなるのは、本稿の文政十二年(一八二九)の印西市松虫の百庚申No.21で、青面金剛像塔一〇〇基を一時に建立し、灯籠一对も奉養している。

続いて柏市域など利根川流域で、天保年間から幕末にかけて、数多く建立されるが、像塔の割合は文字塔に比べて少なくなり、やや大きめの像塔一〇基と定形の文字塔九〇基がセットの百庚申が主流となる。なかでも、印西市武西No.23と浦部No.24、および鎌ヶ谷市大仏の八幡神社No.40はこのパターンで、文字九基おきに像塔一基を配置する建立当時の姿を今もよく伝えている。

像塔に刻像される像容は、六臂剣持型青面金剛像が邪鬼を踏む像が多い。百庚申が建てられた江戸後期から幕末期は、ほとんどの庚申塔が文字塔となる時代で、この時期の青面金剛像は、まさに百庚申あつての像容例であるといえよう。特に印西市笠神の蘇羽鷹神社の百庚申の青面金剛像は、明治と昭和前期の稀有な像容例である。

さらに、すべて文字塔という多石百庚申も野田市や流山、松戸市の江戸川流域にみられる。流山市鱈ヶ崎の東福寺No.37の百庚申は、句碑などによく使用される板石状の自然石に「庚申」と刻んだ風雅な塔である。

また船橋市前原東五丁目路傍の庚申塚No.41の百庚申も、文字塔のみの百庚申である。報告例がないので、筆者が調べたところ

る、享保一八年（一七三三）など青面金剛像塔三基と文字庚申塔一基の前に、細長い駒型の「庚申塔」銘の文字塔七〇基と残欠数基が前後四列に並べられてあった。年銘不明であるが、形態から幕末期以降ではないかと推察される。

百庚申の中央に中尊を配置する事例は、松虫のように百庚申建立以前の庚申塔を置く場合と、武西のように建立以後も百庚申を信仰して追加される場合がある。

石塔群の形態は、定形の駒型石塔を列状に配置する事例が基本であるが、利根川下流域の東庄町域や匝瑳市域では、丸く細長い枕状の飯岡石自然石に「庚申」と刻んで多数集積する形態の百庚申が特異的に多い。（6）

筆者が本会見学会で実見した匝瑳市大浦路傍の百庚申は、元文二年銘の笠付角柱型の青面金剛塔の下の周りに、このような飯岡石製の「庚申」銘の石塔を多数隙間なく立てた形態（写真9）であり、成田市以西で見慣れている百庚申とは異なる東総の百庚申の姿に驚きを禁じえなかった。

また、地域的には、東総から利根川流域と、野田から南下する江戸川流域に多く分布する一方、内陸の八千代市・白井市と東京湾岸の千葉市では、悉皆調査によっても多石百庚申の報告例はない。

多石百庚申は、百基並ぶ特異な景観から、印西市浦部や鎌ヶ谷市大仏の八幡神社のように、観光スポットとして注目される場合もあるが、一方、この時代の石塔がもろい軟質石材であることから、損傷して一部が失われ、後世の補修により改変されたものもあり、さらに我孫子市岡発戸の八幡神社No.26のように一四基のみ残してその残欠が多数積み上げられているものや、柏市高田の正徳寺No.34のように一部が無縁塔に置かれているものなど、もはや原形すらとどめない百庚申もある。

また道路拡張や市街地化により移転を余儀なくされ、松戸市

大谷口の神明神社No.39の場合は二か所の百庚申を一か所に移転、また印西市松虫では半数ずつ二か所に分けて移転していた。印西市武西の百庚申No.23は、その景観のすばらしきもあって印西市の指定文化財として大切に管理されてきたが、近年の大規模な都市開発により、大型の公園の片隅にフェンスで囲まれて立ち入りもできない状態になり、周りの環境の変貌に往時の姿を失いつつある。

百庚申は、柏市布瀬No.28の百庚申のようにムラ往還に列をなして並ぶ姿にこそ、民間信仰を物語る文化財としての価値があり、その調査と共に保存のあり方も問われている現状である。

2 一石百庚申について

「一石百庚申」とは、一石に「百庚申」などの銘がある単一の庚申塔で、榎本氏の北総の百庚申の表では、三例が挙げられているが、今回、報告書などから拾い上げた北総の百庚申の総数は十一例で、造立年順に表2に示した。

分類するにはまだ母数が少ないが、その銘文内容から、①「庚申百箇度参」「庚申百社参詣」などの「参詣」型、②青面金剛百体や「庚申」百文字を刻む「百体」型、③「百庚申」銘型に分けて、先輩諸氏の論考から一石百庚申の系譜を考察し、新しく拾い上げたいいくつかの事例についてもその性格も明らかにしたいと思う。

① 参詣型一石百庚申

榎本氏は、柏市布施弁天No.1の「奉納百庚申百箇度参大願成就」の銘と、印西市松崎・火皇子神社No.4の「庚申百社参詣供養塔」の銘文に注目し、No.1の銘「寛政十二年（一八〇〇）」頃から百体の庚申塔を巡拝するという庚申信仰の新分野の台頭があり、それへの対応として、ムラ内での百体の庚申塔の建立

が行われたと推論されている。

このように百体の庚申塔を巡拝することを意味した一石百庚申は、「奉参詣百社庚申塔」銘の八千代市桑橋No.2の事例にも見られる。

また、「百」の意味は、北総地方に根強い信仰のある百万遍念仏、百堂念仏、百観音巡礼など暮らしに息づく「百」の思想によるとし、百庚申の成立は百庚申参りの成立でもあり、それに伴って一〇カ所の百庚申を巡拝することによる「千庚申」の成立でもあったという。(3)

野田市内には寛政八年の「奉拝千庚申為大願成就」銘を初出として、「千庚申」九基と「萬庚申」一基の庚申巡拝塔が建立されている。(23)このような千や万の庚申参詣も、榎本氏が述べたように、多石百庚申の普及によって可能となったのである。

②百体型一石百庚申

一方、多摩石仏の会の石川博司氏は、一石百庚申が群馬・栃木など北関東や多摩など武蔵地方に多いこと、さらに一石に青面金剛像や、「青面金剛」・「庚申」の文字を一〇〇または多数刻んだ一石百文字庚申塔もあり、その群馬県の事例として縣敏夫著『図説庚申塔』(30)に掲載の寛政六年(一七九四)銘の「倉淵・百体青面金剛塔」や、万延元年(一八六〇)銘の「御霊神社・百書体庚申塔」を紹介しておられる。(28)

前者の倉淵・百体青面金剛塔は、青面金剛像を百体浮彫りした唯一の庚申塔で、縣氏によれば、この後の寛政九年には、近隣の甘楽町に「庚申」文字を一〇〇刻んだ塔が初めて造立され、群馬県内に明治期まで七〇基ほどの一石百文字庚申塔が立てられるきっかけになったという。

後者の御霊神社・百書体庚申塔は、「猿田彦大神」の主銘の周

りに、「庚申」の文字を書家による百の異なる書体で刻んだ一石百書体の庚申塔である。群馬県では一石百文字庚申塔が競い合うように普及したことから、幕末にはこのような凝った百書体塔も造られるに至ったのであろう。

北総では、当会から最近刊行された『東庄町石造文化財調査報告』に、小貝野の文政九年(一八二六)塔No.7の銘文欄には「庚申(一〇〇字)」と記されている。実見していないが、北関東系の一石百文字庚申塔であろう。

また、No.11の銚子市都波岐神社の「大青面金剛百体庚申」銘塔、No.3の八千代市麦丸台の「一百青面金剛王」銘塔も、青面金剛百体を表す銘文と推定される。

江戸時代後期は、庶民が寺社参詣を目的に広く旅行し、また行脚する宗教者と接して、各地の情報が流入し交差する時代でもあったことから、北総でも、系譜が異なる一石百庚申があつて不思議ではない。茨城県内を含め、より広域の百庚申を把握できれば、その分布や系譜がさらに明らかにできると思う。

③「百庚申」銘型一石百庚申

北関東で「百庚申」といえば、自然石に「百庚申」と刻んだ一石百庚申を指すほど一般的な事例であるが、北総ではNo.10の匝瑳市高野の一例のみであった。ほかに、No.5の白井市復の「奉納百庚申塔」、No.8の野田市中里とNo.9の東金野井の「百庚申供養塔」銘の百庚申塔があるが、これらを含め一石百庚申自体の数は意外と少ない。

事例を集めてみないと一石百庚申全体の傾向はつかめないが、石塔数が多く迫力のある多石百庚申や、野田市の事例のような「千庚申」銘の方が、有難味があるように思われたためか、一石百庚申は北総においてはあまり普及しなかったようである。

写真 9

匝瑳市大浦・路傍の百庚申



写真 10

船橋市前原東 5 丁目・庚申塚の百庚申



おわりに

私が百庚申に出会ったのは、子安塔の調査中に鎌ヶ谷市大仏の八幡神社で目にした百庚申の姿であった。たくさんの青面金剛像塔と文字塔が規則正しく神社境内参道に建ち並ぶ姿が印象深く、その後、同様な形態の印西市域の百庚申についても興味を持って調べていたが、関東一円の一石百庚申を広く調べられている石川博司氏と出会って、私の百庚申への認識が、関東の中でも、北総に特殊な多石百庚申についての限られた知識であったことに気づかされた。逆に石川氏は、私が差し上げた笠神の百庚申の調査結果や榎本氏の論考(3)をご覧になって、百庚申への異なった理解と石造文化圏の違いを強く感じられたようであった。(29)

本稿では、二〇一六年三月本会主催の旧本埜村の石造物見学会で案内した笠神の二つの百庚申についての調査報告とする予定であったが、石川氏の手稿『石佛雑記ノート』の記事に背中を押されるように、分不相応にも北総全体の百庚申データを収集し考察する内容となった。

かつて榎本正三氏が、「武西の百庚申」で北総全体の百庚申について調べ、一石百庚申の銘文から百庚申の成立について考察されたのが十七年前。本稿ではそれに新たなデータを補充するとともに、石川氏の手稿に導かれて、一石百庚申を含む北総の百庚申の全体像を明らかにしようという心がけがたつもりである。

拾い逃した百庚申のデータや論考の不十分さも多々あると思われませんが、その点に関してのご指摘、ご指導をいただければ幸いです。

最後に資料検索にご協力くださった能勢様ほか印西市教育委員会の皆様、野田市のデータを提供くださった石田年子様にく御礼申し上げます。

出典・参考資料

- 1 入谷雄二「分析 松戸の庚申塔」『房総の石仏』第十八号 二〇〇八
- 2 『千葉県石造文化財調査報告』千葉県 一九八〇
- 3 榎本正三「武西の百庚申」『房総の石仏』第一二二号 一九九九
- 4 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』千葉県開発庁 一九七四
- 5 『東庄町石造文化財調査報告』房総石造文化財研究会 二〇一四
- 6 宮内欽一「利根川下流域の百庚申石材・飯岡石について」 本会『会報一一五号』 二〇一一
- 7 蔵由美「上総地方の石造物探訪」本会『会報一二四号』 二〇一六
- 8 『小見川の石造物（東・南地区編）』小見川史談会 二〇一三
- 9 『小見川の石造物（北地区編）』小見川史談会 二〇一〇
- 10 「成田歴史玉手箱 庚申信仰」『広報なりた』二〇一五
- 11 土井照美「庚申信仰の石造物・特に成田市を中心として」 『立正大学院年報』第二四号 二〇〇七
- 12 小倉博「一石七体の百庚申」本会『会報七二号』 二〇〇一
- 13 HP「成田に吹く風」<http://narita-kaze.jp/>
- 14 『石との語り』印西町教育委員会 一九九二
- 15 『小林地区調査報告書・印西町石造物第2集』 印西町教育委員会 一九八一
- 16 『船穂地区調査報告書・印西町石造物第5集』 印西町教育委員会 一九八七
- 17 『永治地区調査報告書・印西町石造物第6集』 印西町教育委員会 一九八九
- 18 『我孫子の庚申塔』我孫子市史研究センター合同部会 二〇〇〇
- 19 HP「石仏神心」<http://sekiibutu.blogspot.jp/>
- 20 HP「生まれも育ちも東葛飾」 <http://blogs.yahoo.co.jp/nonki1945>
- 21 『柏の金石文（1）』柏市 一九九六
- 22 HP「雨曇子日記」 <http://blog.goo.ne.jp/tsukazaki-udonko>
- 23 石田年子「野田市百庚申一覽」（手稿）
- 24 HP「写真でつづる流山の道」 <http://nagareyamamichi.blog.fc2.com/>
- 25 入谷雄二「松戸・大谷口神明神社の百庚申」 『房総の石仏』第二〇号 二〇一〇
- 26 『鎌ヶ谷市資料編Ⅱ金石文』鎌ヶ谷市 一九八六
- 27 三谷和夫「東葛の庚申塔」孫子市史研究センター会報 第一二八号 二〇一一
- 28 石川博司「百庚申と千庚申」『野仏』第三六集 多摩石仏の会 二〇〇五
- 29 石川博司『石佛雑記ノート』七六号 七七号 多摩野仏研究会 二〇一六
- 30 縣敏夫『図説庚申塔』揺籃社一九九九
- 31 木原律子他「睦地区の石造文化財④」『よなもと今昔』 一三三号 阿蘇郷土研究サークル 一九九七
- 32 『白井市石造物調査報告書第一集』白井市教育委員会 一九八六
- 33 『日本の石仏』一〇九号 日本石仏協会 二〇〇四
- 34 『匣瑳探訪一〇八 百庚申』『広報そらや』二〇一五

表 1-1 北総の多石百庚申 一覧表

出典の数字は、参考文献の番号。造塔年・塔数の太字は、太字の出典による

No.	所在地	造塔年	西暦	像塔	文字塔	形状	文字塔銘文	出典
1	銚子市・都波岐神社				200以上	駒型	庚申	19
2	旭市東足洗	天保6～元治元	1835～1864		100	駒型	庚申塔	2. 3
3	東庄町笹川(大木戸・庚申塚)	弘化4年	1847		61	自然石	大青面金剛・庚申	5
4	東庄町平山法木作・庚申塚	弘化5年	1848		不明	自然石	青面金剛王	5
5	東庄町舟戸作ノ内・左右神社	不明			42	自然石	庚申塔	5
6	東庄町神田花香・宇賀神社	天保6	1835		101	自然石	青面金剛・庚申	5. 6
7	東庄町栗野宿・庚申塚	天保15	1844		多数	自然石	青面金剛・庚申	5
8	東庄町青馬・庚申塚	江戸末期			98	自然石	青面金剛・庚申	5. 6
9	匝瑳市大寺	不明			多数	自然石		6
10	匝瑳市大浦・路傍	不明			多数	自然石	庚申	7
11	香取市米野井・戸田神社	不明			多数	自然石		6
12	香取市増田・村山	不明			42	駒型	青面金剛王	9
13	香取市北原地新田・稻荷神社	安政7	1860		多数	二連駒型等	庚申	8
14	成田市竜台・路傍	寛政12～安政6	1800～1859	14	85	駒型	庚申塔・青面金剛尊他	3. 10. 11
15	成田市宝田桜谷津(R408傍)	明和元～明治40	1764～1907		70前後	七連駒型等	庚申塔	10. 12. 29
16	成田市宝田後(R408傍)	文久2	1862	4	21	駒型	庚申塔	10. 13. 29
17	成田市西和泉	不明		5	22	駒型	庚申塔ノ孝心塔ノ庚申塔ノ青面金剛	10. 13. 29
18	栄町上町・路傍	慶応2	1866	10	81	駒型	庚申塔	3
19	印西市笠神・笠神社	慶応元～慶応3	1865～1867	18	82	駒型	庚申塔	3. 本稿
20	印西市笠神・蘇羽鷹神社	明治16～昭和10	1883～1935	6	54	駒型	庚申塔	本稿
21	印西市松虫・路傍(2カ所)	文政12	1829	100		駒型		2. 3. 本稿
22	印西市小林・猿田彦神社	天保6～明治元	1835～1864		98	駒型	庚申塔	2. 3. 14. 15

表 1-2 北総の多石百庚申 一覽表

出典の数字は、参考文献の番号。造塔年・塔数の太字は、太字の出典による

No.	所在地	造塔年	西暦	像塔	文字塔	形状	文字塔銘文	出典
23	印西市武西・路傍	文久3	1863	10	90	駒型	庚申塔	3. 14. 16
24	印西市浦部・路傍	天保10	1839	10	90	駒型	庚申塔	2. 3. 17. 20
25	我孫子市高野山・香取神社	天保15年 ～ 嘉永5	1844～1852	9	91	駒型	庚申塔	3. 18
26	我孫子市岡発戸・八幡神社	弘化4～安政5	1847～1858	1	17	駒型	庚申塔	18
27	我孫子市緑二丁目・大光寺	天保13～嘉永元	1842～1848		37	駒型	庚申塔	18
28	柏市布瀬・路傍	文政7 ～ 明治8	1824～1875	9	94	駒型	庚申塔	3. 19. 20
29	柏市布施・布施弁天	江戸後期		6	40	駒型	庚申塔	2. 3. 19.
30	柏市柏・諏訪神社	天保3 ～ 嘉永6	1832～1853	10	80	駒型	青面金剛	3. 21. 22
31	柏市名戸ヶ谷・香取神社	天保6～元治元	1835～1864	10	86	駒型	青面金剛 ・庚申塔	2. 3. 20. 21
32	柏市南増尾283	天保7～昭和12	1836～1937	5	95	駒型	青面金剛 ・百体庚申大願成就	3. 20. 21
33	柏市松ヶ崎・香取神社	天保12～弘化5	1841～1848	4	88	駒型	青面金剛	20. 27
34	柏市高田・正徳寺	天保12～万延元	1841～1860	5	9	駒型	庚申	20. 27
35	野田市西三ヶ尾・香取神社	天保9	1838		68	駒型	庚申・百庚申供養塔	3. 19
36	野田市下三ヶ尾 駒形香取神社	天保11	1840		数十	駒型	庚申・百庚申供養塔	23
37	流山市鱸ヶ崎・東福寺	江戸後期			97	自然石型	庚申	2. 3. 24
38	流山市前平井・旧東栄寺				55			27
39	松戸市大谷口・神明神社	安政7	1860		197	駒型	庚申塔	2. 3. 25
40	鎌ヶ谷市大仏・八幡神社	天保12～天保13	1841～1842	10	90	駒型	庚申塔	2. 3. 26
41	船橋市前原東5丁目・庚申塚	不明			70	駒型	庚申塔	本稿

表 2 北総の一石百庚申 一覧表

造塔年順。すべて文字塔。出典の数字は参考文献の番号

No.	所在地	造塔年	西暦	形状	銘文	出典
1	柏市布施・布施弁天	寛政12年	1800	角柱型	奉納百庚申百箇度参大願成就	3. 19
2	八千代市桑橋 字作ヶ谷津	文化9	1812	駒型	奉参詣百社庚申塔	31
3	八千代市麦丸台・庚申塚	文化12	1815	駒型	一百青面金剛王	31
4	印西市松崎・火皇子神社	文化13年	1816	駒型	庚申百社参詣供養塔	3. 16
5	白井市復・八幡神社	文化13年	1816	駒型	奉納百庚申塔	32
6	印西市松崎・山の下庚申塚	文政4年	1821	駒型	青面金剛尊／百庚申	3. 16
7	東庄町小貝野向地・共同墓地	文政9年	1826	角柱型	大青面金剛／庚申(100字)	5
8	野田市中里・西岸寺境内	文政13	1830	兜巾型	百庚申供養	23
9	野田市東金野井	嘉永7	1854	角柱型	百庚申供養塔	23. 33
10	匝瑳市高野 笹曾根コミュニティーセンター	万延元	1860	自然石	百村 百庚申	34
11	銚子市・都波岐神社	慶応元年	1865	駒型	大青面金剛百体庚申	2. 3